

「原発を語る自由はあるのか？～言論を萎縮させる見えない力～」

日時 2012（平成24）年4月11日

場所 弁護士会館クレオABC

パネリスト 志村嘉一郎（フリージャーナリスト）

山本太郎（俳優）

司会 佃 克彦（東京弁護士会人権擁護委員会委員）

司会： 私は本日の司会を担当いたします佃と申します。よろしくお願いいたします。まずパネリストのお2人をご紹介します。皆さんから見て左側はジャーナリストで元朝日新聞記者の志村嘉一郎さんです。

志村： よろしくお願ひします。

司会： 志村さんは2011年まで朝日新聞の記者であり、朝日新聞を退社した後は大学の講師・教授などを務め、現在はフリーのジャーナリストと評論家をされています。

志村さんの著書はいろいろありますが、今日のシンポジウムにご出演いただくことになった決定的な本をご紹介します。文春新書「東電帝国 その失敗の本質」です。この本は志村さんが昨年6月、つまり昨年3月の事故からまもなくお書きになった本です。後でお話しいただきますけれども、東電の問題について書かれています。

さて、皆さんから見て右手が俳優の山本太郎さんです。改めてご紹介するまでもないと思いますが、そもそも「天才たけしの元気が出るテレビ」…。

山本： さかのぼりましたね。

司会： 「ダンス甲子園」で世の中に出たわけですね。映画では「バトル・ロワイアル」だとか、あと朝の連続テレビ小説の「ふたりっ子」でアメリカンフットボールのクォーターバックの役をして…。

山本： 振り返りますね。

司会： 私が個人的にいちばん記憶にあるのは、「とぶくすり」という、「めちゃイケてるッ！」の前身の前身のバラエティ番組に山本さんがお出になっていたときに、非常に怖いお兄ちゃんのような感じで、ずっと光浦靖子さんを叩いたりして、そしたらナイナイの矢部さんが「カメラが回りだすとどうして悪ぶるの？」と突っ込んでいたんですね。

山本： そんなこともありましたね。

今もマスコミ的にはカメラが回ると悪ぶっていると思われるんです。過激派とか言われますからね。

でも、「どちらの方が過激なんだ？」っていう話ですね。放射性物質をばら撒いておいて…。

司会： そうですね。

さて、その山本さんも本を出しました。「ひとり舞台 脱原発-闘う役者の真実」というタイトルの本。これが今年出ています。

山本： そうなんです、そんなに売れていないんですよ。1冊1300円ぐらいなんですけれども、1冊お買い上げいただくと91円僕にバックされます。よろしくお願いします。

司会： そういうことですので、よろしくお願いいたします。

さて、私からのご紹介はこれくらいにして、これからはお2人にお話を伺っていきます。

まず初めに志村さんにお伺いします。志村さんは朝日新聞の記者の時代にはどのようなお仕事をしていたんですか。

志村： 1973年の3月1日、今から40年ぐらい前に朝日新聞の経済部記者で電力担当になりました。ちょうど石油危機が始まる直前ですが、「電力記者会」というのがありまして、その担当になりました。

最初に東京電力の社長に挨拶に行ったら、大きな部屋の向こうのほうから「おい応援団長、よく来たな」と言われましてね。私は大学で応援団をやっていたのですが、ちゃんと私の身元を調べてありました。「よく知ってますね」と言ったら、「そんなこと分かっているぞ」とかと言って、もうおそらく私の身元は全部調査されていたんでしょうね。私はそれから2年ほど電力担当をやりました。

あと、通産省の担当。これは第2次石油危機の時代です。第1次石油危機の時は電力担当で、第2次石油危機では通産省担当だったわけで、エネルギー関係をずっとやっていました。ほかのところもありましたが、長い間東京電力と電力業界をウォッチしてきたわけです。

司会： その電力担当や通産省担当のときには、例えばどのような取材・報道をしていたのですか。

志村： 経済部ですから、電力料金の値上げの話とか、原子力関係では「原子力発電所ができる」という、そういった話です。

我々は原子力発電所も見に行きまして、実際に炉の上までのぼってみましたけれども、もうそのときには「絶対に安全だ」という話を聞いていました。私は学部は経済学部で理系のことはよく分かりませんから、「そのとおりでな」と思っていました。

また、原子力というのは非常にコストが安いとも言われました。当時、原子力だと1キロワット毎時の電力を作るコストは5～6円で、火力だと10円ぐらいすると言われていました。そういうことで、「原子力発電所は安いんだ。安全なんだ。だから、これをどんどんやることによって日本経済に役立つんだ」ということをずっと言いくるめられまして、私もそのとおりでと思っていたわけですね。だから、原子力発電は進めるべきだという論調で記事を書きました。

司会： 第1次オイルショックのときに電力担当で第2次オイルショックの時には通産省担当だったということは、時期で言うと昭和50年代あたりのことですか？

志村： そうですね。第1次オイルショックが昭和48年だから、だいたいそのあたりのこ

とです。

司会： その時代における原発の位置づけはどういうものでしたか？

志村： 当時はまだ原発はできたばかりでした。関西電力と東京電力がいくつか持っていただけでした。増えていったのはその後のことです。

司会： 世の中が原発を見る目はどうでしたか？当時は、無限のエネルギーを生み出してくれる夢の発電方法というようなイメージだったのでしょうか。

志村： そうですね。そのころは石油はオイルショックで電力料金が4倍に上がりましたし、ローマクラブが「資源は有限だ」と言っていました。それから、石油を焚くと炭酸ガスが出るとか公害が出るということで、原子力はクリーンなエネルギーだという宣伝も電力業界はしていました。

司会： もう一つ志村さんにお伺いします。今から20年以上前にチェルノブイリの事故があつて、広瀬隆さんが「危険な話」という本を書いて、あのころも世の中では原発反対の機運がかなり盛り上がっていたと思うのですが、そのころは志村さんは原発に対してどのようにお考えでしたか？

志村： そのときは既に担当が違っていましたので個人的な興味しか持っていませんでしたが、電力業界は「チェルノブイリは炉が違うんだ」と言っていました。「炉の形が違うし、ロシアは技術が未熟だ。日本の炉はもっと技術が安定しているし全然違う。」とか「日本ではああいう事故は絶対に起こらない」と説明をされていて、私もそれをそのとおりで思っていました。

司会： そのような認識はいつ変わったのですか？

志村： やっぱり昨年3月11日の地震ですね。テレビをずっとつけっぱなしで見っていました。福島原発が爆発して、記者会見には東電の社長・会長が出てこない。それから、通産省、経産省の記者会見もしどろもどろということで、「これはおかしいぞ」と思いまして、我々はだまされていたんじゃないかと感じました。

司会： 今度は山本さんにお話を伺います。

山本： はい。

司会： オイルショックまでさかのぼってしまうと山本さんは生まれたばかりのような感じもするので…。

山本： 僕が生まれたのは昭和49年です。

司会： 最近のことでちょっとお伺いしますが、昨年3月の福島の事故が起きる前の山本さんは、原子力発電に対してはどのような認識またはご意見をお持ちでしたか？

山本： 3.11前には原発のことについてはほとんど考えてきませんでした。原発のことは3.11デビューなんです。

自分で知っていたことといえば、発電でゴミが出るということ。僕は環境保護団体グリーンピースのサポーターをしているんですけども、日本の食文化に口出すやつらみたいなイメージがあるかもしれませんが、その運動が結構多岐にわたっていて、その中に原子力というものもありました。9年ぐらい前にホームページを見たときに原子力のことが書いてあって、これは持続可能なものではないんだという認識を持ちました。でもその程度のイメージでした。まさか地震・津波に対する想

定があそこまででたらめだということは知りませんでした。将来的にはエネルギーとして変わっていかなくてはいけないんだろうなというよううっすらした認識しかありませんでした。

司会： しかし、9年前に持続可能なものではないんだという認識を持っていたというのはかなり珍しいのではないですか。

山本： そのホームページに書いてあったんですよ。「持続可能なエネルギーではありません」って。原発は沢山のゴミを生んで、そのゴミを何万年も保管しなければならないのにその問題を先送りしているんだと。

つまり、核のゴミの処理・保管の方法が何も見つかっていないということが書いてありました。ガラス固化体にして地層処分みたいな形にしても100年単位でしか管理できない、しかもその耐久性さえも分からない、というようなことが書いてあったんです。

「なるほど」と。原子力ってそういう問題をはらんでいたんだということをそのときに知ったんです。

でも、それを知ったからといって原子力発電はまずいだろうという認識にはなりませんでした。

自分の考えの浅はかさというか、3.11で原発・電源がダメになって、冷やせなくなったということを知ったときに、9年前にそういう問題を知る機会があったのに認識を深めなかった自分に対してすごく怒りが湧きました。

以前は、社会的な問題に対して芸能界の者が声を上げるということは考えていませんでした。グリーンピースのサポーターをしているのは、自分が声を出さない分、社会的な運動をしている団体をサポートしてそういう人たちに頑張ってもらおうという意味でした。

でも、3.11があって原発がああいう状況になったというときに、もうこれは全員が声を上げなければならないと思いました。遅ればせながらで申し訳ないんですけども。

司会： 今のお話は、まさに私にも突きつけられている問題で、私は、学生時代にチェルノブイリの事故を経験して広瀬隆さんの本を読んだのに、そのときにはそれで終わってしまって、去年の3月で急に慌て出したというところがあるので、今のお話は胸に突き刺さりました。

さて、3.11デビューの山本さんが、今のお話のように声を上げなければいけないと思って、まず最初に対外的に反原発とか脱原発の意見を発信したのはいつのことでしたか。

山本： 事故から3週間ぐらい経ったときだと思うんですが、ツイッターで、僕は反原発ですよと、原発なんていらなないと思いますと言いました。

でも、原発なんてあってはならないという気持ちは、3.11の直後からずっと持っていたんです。友達との間でもそういう話になり、酒場でもそういう話をしていました。けれどもそれを外に向けて大きい声で言っていないので、自分としてもずっと気持ちが悪い状態でした。穴掘って「王様の耳はロバの耳！」みたいなことしか

やっていないわけです。だから、外に向かってはっきりと自分の意思表示をしていないということにすごく罪の意識を感じていました。

今、表向きに声を出さず、心の中で脱原発とか反原発だよというのは何の意味もないのではないかな…。3週間ずっと自問自答を繰り返しました。そして最後にもう我慢できなくなったということです。

本当に夜寝れないんですよ。寝ていても眠りがすごく浅いし、眠りから覚めても頭の中でまた自問自答が繰り返されるわけです。一方の自分が「お前は声を上げないわけ?」「声を上げないということは、お前は原発を推進しているのと一緒にじゃないか」と言い、それに対してもう1人の自分が「でもしょうがないじゃないか。俺の住む商業放送の世界はスポンサーありきで成り立っているんだから。そのスポンサーにつばを吐くということが仕事なくなるよ。」と言い訳をするような問答です。

そうするとまた最初の自分が「じゃあお前が正面きって声を上げるのは誰かに被害が出てからなのか?」と言い、3週間はそんなことの繰り返しでした。

全部自分1人のことなので周りには分からなかったかもしれませんが、そういうしんどい思いをして、「これはもう言うしかない」と最後には思いました。

でも、言えてよかったです。

というか、「みんなが言え」とも思います。3.11があって、ちょっとその後何か月間ぐらいは原発に対していろいろな意見交換は活発にできたけれども、ここに来てそういう話をするのも聞くのも面倒くさいというような風潮があったりとかというのを感じるんですよ。

これは原発の問題だけではなくてがれきの問題もそうだし。すごくアンタッチャブルになっているというか…。

人を移動させさなくてはいけないというのはごくごく当たり前のことですね。放射線管理区域以上の数値のところ子どもが過ごしているのにそのことに今触れられない雰囲気。「もう復興に向かって頑張っているから」とか言いますが、復興も何も、放射線管理区域って18歳未満立ち入り禁止だったようなところに子どもがいるわけですよ。そういったいろいろな問題が絡み合っているのにそのことについてすごく触れづらいというか…。

商業放送ではそういうところが排除されていますよね。再稼動問題で今ちょっと取り上げられていたりするけれども、根本的な部分に関しては無視されがちですよ。すみません。話がかなりそれましたかね。

司会： いえいえ。

最初にツイッターで対外的に発言をするまでの間、そうとう悩んでいらしかった。その悩んでいる間に、対外的に発言することによって自分の俳優としての立場が危うくなるかも知れないということも既にお考えになっていたわけですか？

山本： そういう発言をすると、俳優としての活動領域がだんだん狭まっていくだろうなとか、真綿で首を絞められるような状態になっていくだろうなということは想像がつかしました。

でも、ちょっと上手にやろうとも思いました。声は上げるけれども、そんなに“いけいけ”で言うのではなく、バランスを見ながら。首が絞まっていく速度は極力遅いほうがいいですからね。

でも子どもに対しても20ミリシーベルトに引き上げた時点で自分の中でぶち切れました。もうあれは本当にあり得ないというか、これは我慢できないと思って、文科省前で抗議があるという話を聞いて、マスコミたくさん来るのは分かっていたけれども、もう行ってやろうと思って、映ってやろうと思って行きました。

司会： 同じように煩悶して、しかし、自分は意見を出すのをやめようと思った人ももしかしたらいるかもしれませんね。俳優さんの中には。

山本： どうなのかな…。あ、でも、いますね。

ツイッターで、女優さんが、原子力発電を批判するようなことを書いたけれども、それを取り下げたということもありました。何人かそういう方もいました。

でもやはりすごく難しい問題で…。みな自分1人で生きているわけではないんですよ。例えば、ある事務所に有名な女優さんがいたとしたら、そのスタッフも食べさせなきゃいけないし、家族も食べさせなければいけないとか。タイ人のキックボクサーのチャンピオンみたいな感じで、親戚まで養っているみたいなイメージです。だから、自分1人の思いをなかなか押し通せないようなところがあるのかもしれない。

司会： 志村さんにお話を伺います。昨年3月のあの事故を見て考えがぐるっと変わったというお話でしたが、それですぐに本の執筆に取り掛かって、6月にはもう本をお出しになったのですよね。何が志村さんをこの本の執筆に駆り立てたのですか。

志村： 執筆に駆り立てたこととしてまず言えることは、東京電力の社長・会長が記者会見に出てこないということです。

清水社長はその日は奈良のお水取りに奥さんで行ってしまっていて、それで事故のことを聞いて、夜に名古屋に着いて、午後11時に自衛隊の飛行機に乗って東京に帰ろうとしたわけです。おそらくお水取りが終わった後、新幹線が動いていないので自衛隊の飛行機に乗って帰ろうとしたのでしょう。自衛隊の飛行機に乗って飛び立って16分して、防衛大臣が、「そんな話は知らない、すぐ引き返せ」ということで飛行機から降ろされて、そして車で東京へ。東京電力に次の朝の10時によく着くわけです。

そのときに勝俣会長と鼓筆頭副社長、この鼓という人は原子力・立地本部の副本部長でもあるんですけども、この2人は北京にマスコミのOBを連れて行っていました。有名な週刊誌の元編集長、「週刊文春」や「週刊現代」、あと中日新聞とか毎日新聞のOBとか、朝日は行かなかったんですけども、そういうマスコミの人を連れて北京に行っていたんですね。だんだん分かってきたんですが、会費は5万円だそうです。つまりほとんど東電持ちで北京に行って、勝俣さんは次の日に飛行機をつかまえてやっと帰ってきました。

会長・社長がいないものですから、原発に海水を入れるという判断ができませんでした。海水を入れると1基3000億円以上する原発がダメになってしまうので、現

場の判断ではどうしようもできないわけです。

会長・社長は、そんな状態を引き起こしておいて記者会見にも出てこない。広報課長がしゃべっているだけで全然無責任な体制なのですね。

東京電力というのは自分の管内ではなくて、東北電力の管内に原子力発電所をつくっているのですが、東北電力よりも自分たちのほうが規模も大きいし、会社も大きいのでおごっているんですね。今まで40年近く取材してきましたので、やっぱりこの会社はおごっていると思いました。その後に本を書いたりしたときに削られたこともありまして、批判ができないようなことがあったのですが、やはりおごっている中からこういう事故が起きたんだと思いました。だから、東電の実態を明らかにしなければいけないということで書き出したわけです。

この本は昨年の4月1日から20日間で書きました。東京電力では2001年に事故隠しがあったんですけども、その反省の上に立ったことをやっていなかった。それから、政治献金をばら撒いているわけです。これは本にも書いたのですが、木川田さんが会長のときに、社会党の代議士が国会で電力について厳しい質問をしていて、それを見ていて木川田さんが、「金を持っていけ」といって、すぐ現金を積んで持っていったらその代議士の電力批判が止まってしまったという話もあります。これは実際に私が聞いた話ですけども、こうして政治献金で黙らせる。

それから、朝日新聞社も最初は原発に対して「ノー」だったんですが、それが「イエス」に変わるわけです。それは広告の問題とかいろいろありまして、その辺をこの際明らかにしようということで、朝日新聞の社史から取り出して書いて、新聞社がどうやって原発賛成になっていったかということを書きました。

それに、9電力体制というものがある。地域独占で競争相手がいませんから値上げがほとんど自由にできる。消費者が電力会社を選ぶことができない。値上げをされてもただ黙ってそれを受け入れるだけだという問題ですね。戦前は全部自由競争だったんですよ。だから戦前の場合、例えばA電力とB電力の2本線が引かれていて、A電力が「3カ月タダにするから契約してくれ」。今度はB電力が来て「うちも3カ月タダにするから契約してくれ」と。何か新聞の拡張みたいな話なんですけど、そういう時代があったんです。それが戦後は9電力体制で地域独占になった。

しかも3.11の事故の後、東京電力は計画停電をやった。地域独占というのはその分、必ず電気を供給しなくてはいけないのに、いきなり電気を消していった。これは彼らが供給責任を放棄したことであって、それならもう地域独占をやめなくてはいけない筈です。そういうことに憤りまして、書かなくてはいけないと思ったのです。

司会： 山本さんに伺います。4月ですか、ツイッターで「反対だ」ということをつぶやいた後、山本さんは、意見表明をするだけではなくて行動も伴っていたと思うんですが、例えばどういう行動をなさったのか。それから、行動まで起こしたというのはどうしてですか。

山本： 別にたいしたことは何もやっていません。本当に。何をしてもいいか分からないというのが正直なところなんです。3.11デビューだし。

これまで社会運動に参加したことがないので何をしたらいいのか分からないんだけど、でも、言うだけで何もしないわけにはいかないというか、自分が納得いかないというか。

とりあえず、「デモをやるらしい。よし行こう。」みたいな感覚ですね。ネットを見ると、こういうところで集会をやりますという情報が流れるから、行ってみたんです。

1万人いたらその人たちができることというのはそれぞれ違うと思うんですね。運動を拡げるためにそれぞれの人ができる有効な手段は違うと思うんです。例えば、シュプレヒコールがうまい人ならデモの先頭に立ってそういうことをやればいい。だから、その人の得意な分野によって運動の広がり方も変わると思うんです。

それで、自分の得意なことは何だろうと思ったときに、やっぱり芸能界にすることを生かそうと思いました。芸能界でこういうふうに声を上げている人は極端に少ないので、自分が、ここに注目して欲しいんだと思うようなところに行けば、そして、どんな取材でも受けますと言えば、メディアから取材される可能性が高いわけですね。取材されれば、報道される可能性も高まる。普通だったらスルーされることでも、ちょっと記事に載ったりする可能性があるなど。自分はそれでいいんじゃないかと思ったわけです。

例えば、人が集まるというときに僕が「行きます」と言えば、芸能人もいるから行ってみようかなということでも人が増えるかもしれない。そういう客寄せパンダでいいから、それが自分ができることなのかなと。

だから、自分がやれることは何だろうと考えつつ動くことで正解を見つけていったという感じですね。

司会： きのうのシンポジウムも山本さんが出るから来たという方もたくさんいらっしゃると思うので。

山本： そうですか？今日の皆さんは、いちいち説明しなくてもよさそうな感じの方じゃないでしょうか。

司会： そのように活発に行動をする山本さんを見て、周りの人の反応はいかがでしたか。

山本： 芸能人からは励ましの言葉をいただいたことがありますね。「応援しているよ」とか「すごいね」とか。

でも、「俺にはできないよ」とも言われます。「やばいよね、今の日本の状況」みたいなことを話しかけてくれる人もいますが、「でも俺にはできないけれども」という言葉がすぐに後ろにつくという状況です。

それにしても、今の状況を理解していない人が圧倒的に多いんですね。先日、昔ドラマで共演した女優さんに電話したんですよ。「元気？」みたいな話から始まって、「何か太郎ちゃんいろいろ活動しているみたいね」とかって。それで原発の話になったんですね。それで僕が「今、54基あるうち1基しか動いていないんだよ」と言ったら、「えー？そうなの？」って。54基あっていま何基動いているのかという情報さえも知らないんですよ。こういう風に、3.11前と同じような生活をずっと送っているような人が結構多いんです。これはやっぱり、メディアがいちばん大き

な原因じゃないかなと思います。

司会： メディアが？

山本： はい。メディアが。主にテレビなんでしょうけれども、一部には違う部分もあるかもしれませんが、やっぱり大手メディアはお金に魅力を感じて、本当のことをなかなか出さないし…。

もちろんお笑いの番組もすごく必要ですよ。我々にとってもね。日常を忘れたいということもあるでしょう。でも、危機的な状況に立っている我々をちゃんと切り取って検証したりみんなに訴えかけたりする番組はあまりにも少ないですよ。どちらかといったら、日常を忘れさせる方が多い。

大手メディアから入ってくる情報では今置かれている状況を判断しづらい、自覚できないものがあまりにも多いじゃないですか。

だから、原発の話をしたときに敏感に反応して、「あー知ってる知ってる」という人は意外と少ないですよ。何となく原発はいらないとか、いやだなというような程度のフワフワした感じの人は多いかもしれないけれども。

今自分たちが立っているこの場所の危機的な状況を意識している人は本当にごく少数なんだと、同じ世界の仲間から感じますね。

司会： そういう活動を始めて周りからいろいろな反応が出てきた山本さんに昨年、一旦決まったお仕事がなくなったということがあったそうなんですけれども、それはいつごろのことですか。

山本： 去年の5月ですね。

司会： 活動を始めてもうまもなくのことですね。

山本： そうですね。

でももうその頃にはスポーツ新聞とかで「反核野郎、また出てきた」みたいなことを書かれていました。それまでは「上手にやっていかなきゃいけない」「先々仕事が減っていくんだから、今のうちにちょっと仕事を重ねていって蓄えておかなければ」と思っていたんですけれども、先ほどお話した、子どもたちの20ミリシーベルトの問題も出てきたので、もうとにかく大声で叫ぶしかないと思い始めたころの話でした。

司会： どういうことがあったのですか。

山本： ドラマの仕事がなくなってしまったんです。

ドラマが決まっていた、台本に名前が刷られるところまでいって、スケジュールも夏ぐらいから撮影に入るという状況でした。それが、ある日マネージャーから「ドラマの話はなくなりました。太郎くんの原発発言でなくなりました」というようなメールが来て、「えー！」と思って。

司会： そのメールを受け取ってどう思いましたか？

山本： そのとき思ったのは、怒りじゃないんですよ。マネージャーに対して申し訳ないなと思って。

司会： マネージャーに対して？それはどういうことですか？

山本： 僕たちの仕事って、いつきの旬の人を除けば、オファーが来るのを待っている

だけじゃなくて、営業をかけないといけないんです。俳優にいい役をさせたいと思ったら、プロダクションがその役をずっと追いかけてくなくてはいけないんです。例えば、企画の段階から入って行って、そのドラマに自分のところの役者を入れるまで追いかけてくるのです。台本の第一稿ができましたと言われたらそれを読みに行ったりとか、そういう接触を持って、とにかく追いかけてくという下準備をした末にようやく「この役でどうでしょう」ところに漕ぎ着けるわけです。

今回の場合は、そうしてようやく漕ぎ着けたと思ったらこういうことになったと。マネージャーは多分、僕の役を取るまでに何カ月も費やしたと思うんです。だから、マネージャーに対して申し訳ないとまず先に思いました。

一般の方は、原発のことにこれだけ強く口を閉ざした芸能界の人間たちはいったい何を考えているんだろうと思うでしょう？ どうして芸能界の人たちって原発のことを何も言わないのかと。それは、こういうことがあるからだということを伝えたかったんです。

司会： 伝えたかった？

山本： そうです。要は、仕事上不利益を被るからみんな口を開かないんだということを伝えたかった。

普段必要なエネルギーの問題で、それが今こんな状況で自分たちの命にかかわる問題にもなって…そうしたらみんなで広く話をするのが普通なのに、どうして芸能人は声を出さないのかというと、こういう不利益を被るからなんです。「こういう不利益を受けるからなんですよ」ということをみんなに分かってほしかった。こういうことがあるからみんな口を閉ざすんですと。

司会： なるほど。それで山本さんはこの降板の話を公表したのですね。

山本： はい。でもこの話を僕がツイッターで言ったら、話が全然違う方向へ行っていました。ツイッターを読んだ人たちが、「どこの局だ？」「何のドラマだ？」と犯人捜しを始めてしまったんです。原発の話からかけ離れたワイドショー的な興味に移ってしまった。

僕にとってこれはとても不本意なことでした。話がそれるわけですから。

テレビ局にも抗議が行くことになるでしょう。でも、その抗議が何日間か続いたら、多分いちばん喜ぶのは、何もしない体制側でしょう。それだけは絶対避けたかったのに、そっちのほうに行ってしまった。ですから、この話を発表したのはちょっと間違いだったのかなと思ったりもしました。

そういえば、この話をさっき打ち合わせの席で軽く話していたんですけども、志村さんが「どこの局？どこの局？」って。「それは言えないです」と僕が言ったら、「ここだけだからいいじゃない」って。「いえ、それ絶対にもれるじゃないですか。」と言っても志村さんは「どこの局？」「どこの局なんだ？」って（笑）。

「どこの局は東電の株を持っているんだ。口外しないから。」って。

司会： あんまりしつこいから僕が止めに入っただけですね（笑）。

さてその志村さん。そのように原発に反対するとドラマの仕事がなくなるという社会状況あるいは構造を、志村さんであれば東電その他の電力会社を間近に見てき

ているので具体的なイメージで理解していると思うんですけども、これはどういう構造なんですか。

志村： 僕は「東電帝国」と名づけたのです。要するに、金の力でマスコミも学者も、それから国会議員も役所も、全部絡めとっているんです。

それで、山本さんにどこのテレビ局かって聞いたかったんです。なぜかという、東京電力がテレビ局の株を持っているわけです。これは今までは知らなかったのですが、たまたま平成22年度の有価証券報告書を見たら、東京電力が株を持っている上位30社の中に、テレビ局は東京放送ホールディングスを66万5280株、テレビ朝日を3100株持っているんですね。その保有目的は、「当社事業の円滑な遂行のため」と書いてあります。なぜ電力会社がテレビ局の株を持っていることが遂行のためになるか分かりませんが。それから、フジテレビの場合は、フジテレビと、それからフジホールディングスの両方の監査役を前の東電の社長だった南さんがやっていますね。NHKは、経営委員に東電OBを抱えていた。日本テレビは読売系ですから、読売と日本テレビは正力松太郎さんがつくった。正力さんとは原子力発電を進めてきたいちばんの神様みたいな人で、これはもちろん原子力推進ですね。あとテレビ東京は日本経済新聞が大株主。日本経済新聞は今、原発推進です。ということで、テレビ局はがんじがらめにからめ取られているんです。

それから、東京電力の広告宣伝費が年間大体210億円です。電力会社全体だと年間900億円くらいになるんじゃないかと思われます。これで新聞にも広告を出しますし、雑誌にもテレビにも出すわけです。

本にも書きましたが、朝日新聞はオイルショックのときに広告がなくなっちゃって意見広告を紙面に載せることを解禁した。そのときに電気事業連合会が原子力の意見広告を出してきて、これを朝日が受け容れた。だんだん朝日新聞の記事本体にも原発推進の考えが入り込んでくる。そしていつのまにか朝日新聞の編集のほうも「ノー・バット」を「イエス・バット」にして、原発はどうしても必要だという論調に変わったのです。

読売新聞はもともと賛成ですし、毎日新聞も反対から賛成に変わった。

それとともに政治家には政治献金はやめたといえども、関連会社を通じてお金を配っていますし、個人献金を会社で集めて配っていますね。パーティ券も買っています。東京電力の総務課長、一課長の年間の交際費が20億円です。20億円と聞くと莫大ですが、東京電力は5兆円の売上ですから、年収500万円の人が2000円のうなぎを食べるぐらいの感じなんです。20億円ですと政治家のパーティ券というのは20万円までは名前を出さなくて買えるわけです。そうすると20万円で20億円を割りますと1万口買えるわけですね。領収書なしですね。こういうお金はみな総括原価方式で全部我々の電気料金に入っています。

そういう形でがんじがらめに支配している。もちろん東大の原子力の先生なんかにはどんどん補助金を出しますし、研究所にも出す。電力中央研究所には東京電力100億円出しています。これは電気料金の0.2%ということで、電気料金が上がればまた電力中央研究所の研究費が上がる。だから、電力中央研究所を通じてまた東大

に配るということをやっているんです。

そういう構造になっていまして、我々は黙って電気料金を払っているのですが、実はその電気料金の中に、マスコミや政治家を買収する経費、みんな入っているわけですよ。それで年間3000億円ぐらい経費を使いながら、原子力は非常に安全だと言うのが、この40年間の間に培ってきた構造です。

だからテレビ局としても、そういう東京電力なり電力会社からスポンサー料が入らなくなると大変になるものですから、やっぱりちょっと忖度して、批判が出る人は出さないわけです。

山本さんもこういう構造の中でそういうことになったんじゃないかと思います。

私も本を書いたときに、たくさんの人から地下鉄の端っこを歩かないほうがいいよと言われました。それから、女性3人組みに近づくなと。ちかんにされるぞというようなお話もありますし。それから、これは最近のツイッターに出ているんですけど、矢野匠さんという方がいます。これは本名かどうか知りませんが、この人は東電のOBだそうで、ブログを開いていろいろ発言していたんですね。ところが昨年11月9日の午前3時、突如ブログの閉鎖を宣言した。内容は言えないけれども、身に相次いで怖いことが起きたと。残念ながら活動を断念して、以降はおとなしくしていないと自分の精神が壊れてしまいそうだと。東電社員が語る脱原発としてブログをやっていたんですけど、身辺が危なくなっただけで閉じるというのです。あまり表に出ていないんですが、そういうふうな動きの中で山本さんもやられてしまったということではないかと思います。

司会： 先ほど東電の総務課長が年間20億の交際費が与えられていたと。

志村： はい。

司会： そうすると、課長の上の部長はまたもっと大きい枠を持っていたりするわけですか。

志村： そこは確認していないのでその上の方がどれだけもらっているかは知りませんが、とにかく東京電力というのは、独占企業だから営業がいらないのに営業をしているわけです。

私は毒饅頭を食べていないから本が書けたんですけど、そうとう毒饅頭を食べさせられている人がいるのではないですか。

司会： 山本さん。ドラマの降板の話をもう少し聞かせて下さい。山本さんを降ろすことになったテレビ局には、誰からどういう働きかけがあったと山本さんは思いますか。

山本： 働きかけは特にはないと思いますよ。テレビの制作現場の気遣いだと思います。山本を使わないほうがいいという気遣いですよ。どこから圧力がかかったという問題ではないですよ。そんなことわざわざ圧力をかけないと思います。現場が空気を讀んだんですよ。

ドラマの話とは離れるんですけど、地方局で仕事をさせてもらうことがあった時、すごく骨のあるプロデューサーがいて、ぜひ僕と仕事をしたいと思ってくれたそうなのですが、僕の名前が上がったとたんに局の営業からすごく圧力がかかったんですって。クレームがいっぱい来るんですって。この不況の中でドンとお金を

出せる企業というのは限られるわけで、大きなお金を出せるのはやっぱりエネルギー関連になりますよね。だから、局の営業からしたら、電力会社に嫌われたくないわけで、局が僕を使うというのはすごく迷惑なわけです。「山本を使うのはやめろよ。ジョーカーじゃん、そいつ。」みたいな話です。それで社内ですごい議論になって、「逮捕されるかもしれない男をどうしてわざわざ使うんだ？」という話になったそうです。そのプロデューサーは、「逮捕される可能性なんて全員にあることだ」と話して丸め込んだと言っていました。すごく骨のあるドキュメンタリーをずっと撮り続けている方だったのでその話は通ったんですけども、「うちの局でもこれくらい横槍やプレッシャーがかかったんだから、ほかの局も全部そうだと思う」という話をされていました。

東電であれば、今これだけの問題を抱えているからそういう細かいことにまでは目を配れないこともあるでしょうけれども、地方は関係ないですもんね。電力会社はやっぱり力を持っているんです。だから営業としてはそういうところでもめたくない。「わざわざ山本を使う必要がないんじゃないの？」という考え方ですよ。

僕、今年からやっとスケジュールを仕切ってもらえる若い人と出会えました。事務所を辞めた後はなんでも自分でやっていて本当にもう手が回らなくなって、メール箱も200通ぐらい「未読」みたいな感じだったんですが、それを見かねて昔友だちだったマネージャーさんが「自分のところの若いやつがいるから貸してあげる」と言って、若い人にマネージャーになってもらったんです。その子が手が空いたときに営業しに行ってくれたんです。いろんな人に会いに行ってもらったんですけども、営業から帰ってきたマネージャーは、「みんな心配されていました」と。心配してくれるのはありがたいけど、営業の成果はどうだったか聞いたら、大体皆さん同じリアクションをされるんですよ。「今はちょっと」だそうです。「今はちょっと」ということは、もうずっとないですよ。

司会： 山本さんをドラマから降ろした力は、実はテレビ局の自粛だったわけですか。

山本： “テレビ局” というような小さくくりじゃないですよ。もっと小さくくりだと思います。局としてではなくて、もっと小さな、現場の空気読みということですね。テレビ局よりももっと小さな。その隅々までも染み渡っている空気読みの風潮というのがすごいですよ。

司会： 志村さん、電力会社側から、あるいは通産省側からああせいこうせいといわれなくてもそのようにしようという空気読みの習慣が染み渡っているというお話なんですけれども、そうすると、志村さんの言う「東電帝国」というのが帝国としてもうしっかり完成しているということなんでしょうか。

志村： そうですね。空気読みが末端まで行き届いているんです。染みとおっているんです。この本の前の本を書いたときに、それは電力の経営をずっとやってきた人を70人ぐらい書いた本があるんですけども、「闘電」という…。

司会： 闘う電気で「闘電」？

志村： ええ。70人ぐらいの経営者の話を書いたんですけども、その本のあとがきに、9電力体制はもう終焉を迎えるという話を書きました。9電力体制も60年をそろそ

ろ迎えるからほころびが出ているんだと書いたのです。そうしたらその部分をバートンと削られたんです。これは電気新聞から出ている本なのですが、電気新聞というのは日刊紙で、電力会社がほとんど買っていますから、それはまずいということで削っちゃうわけですよ。

朝日新聞の記者の時代だったらそんなことやられたらけんかするんですが、フリーになっているし、本を出すためにはしょうがない。黙って泣きました。

それから、「東電帝国」を書いた後、日本電気協会の協会報に頼まれて、その最後のほうに、この原発事故で原発はすべて止まるだろう、9電力体制はこれから自由化に向かって考えなきゃいけない、と書きました。すると協会の上のほうから、この原稿はボツにすると言われました。理由を聞いたら、「これはそぐわない」と。「3万円だけ原稿料を払うから」というから、「ふざけるな。原稿料なんかいらないから原稿をすぐに返せ。」と言ったんです。原稿料をもらってしまうと文句言えなくなってしまいますからね。

このように、日本電気協会とか、あるいは電気事業連合会とか、電気関係の団体には全部そういう感覚がいきわたっています。

それから、東京電力から仕事をもらっている建設会社ですとか、放射能を除去する膜をつくっている化学会社ですとか、そういうところも東電のコントロールの効く領域に入っているんです。がんじがらめになっていて、しかも、東電のほうから言わなくても、東電に迷惑がかかるようなことや東電を批判するようなことは自粛しようという空気があるわけです。

さっきも山本さんが言ったように、この不況下でも電力業界にはお金があるので。不況なのに値上げができるのは電力業界くらいなものでしょう。その値上げを国民は黙って受け入れるしかないわけです。そういう構造の中ですから。広告を出してもらおう側からすればもう電力会社さままなんです。

司会： 志村さんの本の中に朝日新聞が原発賛成に変わったというチャプターがあって、そこに詳しく書かれているんですが、朝日新聞が、「ノー・バット」から「イエス・バット」に、つまり、原発反対の立場から基本的には賛成だという立場に変わったわけですね。そのあたりのことをもう少し詳しく教えて下さい。いつごろ何があって朝日は見解を変えたんですか。

志村： 原因としては、石油がなくなってきて石油は高くなり、石油・火力だけではやっていけなくなって、原子力をやらないと日本経済は行き詰ってしまう。だから原子力をどんどんやるべきだ…という話ですね。

朝日は今まで原発に反対してきたけれども、この辺で原発に賛成して、安全性の問題だけを追究していこうというふうになるわけです。私が聞いたところによると、朝日には原発を推進している上層部がいて、その人たちが、「原発が危ない」という朝日の論調を変えなきゃいけないと考えて意見を変えたそうです。それまで原発は東京と関西電力が数基しか持っていなかったんですが、その頃から大々的に9電力で原発を作っていこうという、そういうことのはじまりの時期だったんですね。

これは朝日が変わったというだけでなく、役所の動きとか政界の動きも全部連動していたんじゃないかと思います。朝日新聞の社史では、エネルギー不足、石油不足からそういうふうに変わっていったと説明しています。

司会： 朝日は表向きはそういう説明をしているかもしれませんが、そのように資源問題などを憂いて賛成するようになったという問題なんですか。実際のところはもっと違うファクターが働いているんじゃないのですか？

志村： 広告料の問題ですか？

新聞社の場合は、昔は新聞代金が45%で、広告料が55%ぐらいでした。だから、不況になって広告料が減ると大変でした。さっき山本さんが言ったけれど、電力会社は広告料を値切らないんですよ。全国版で1ページ2000万なら2000万をポンと払うわけですね。ほかの会社は値切ってくるけれども電力会社はパッと買ってくれる。そういういいお客でした。ただ、朝日新聞社の場合は編集権は独立していますから広告を出す力で記事に文句をつけるということはないんですよ。あの時代は今ほど不況ではないし、新聞がまだ読まれていた時代ですから。

司会： 山本さん。ドラマの降板事件があった後、比較的すぐだと思んですけども、所属していた事務所を退社しましたよね。

山本： はい。

司会： それは何があって退社することになったんですか。

山本： 事務所にいろいろな電話がかかってくるんです。誹謗中傷の電話とか、「右翼の者だけれども」みたいな電話とか。とにかくそういう電話がひっきりなしにかかってきて、事務所が通常の業務をできなくなってしまいました。

事務所には僕以外にも20人くらいの役者がいて、その人たちにそれぞれ仕事があって、例えば「あしたのスケジュールは…」みたいなことを伝えるために外から事務所に電話してくる人もいるわけです。でも、全くつながらないわけですよ。そういう電話がじゃんじゃん鳴るわけだから。

そういう状況なんだけどという電話が、事務所の社長から僕宛てにかかってくるんですよ。どうしたもんかなという電話。

それを聞いたときに僕は、「じゃあ1分後に電話します」と言って電話を切りました。僕がこの先こういう運動に加わっていくと、事務所の電話が鳴り止まないわけですよ。毎日のように電話が鳴るわけです。ということは、僕が運動することと事務所にいることとは両立しないんですよ。事務所に居続けて僕がこの運動をする限り、そういう電話は鳴り止まない。ということは、僕が事務所を出るしかないですよ。もしくは、僕が事務所に居続けるなら運動のほうをやめるか、どっちかしかないわけです。ということは、もう事務所を辞めるしかないんです。だって、運動をやめるということは未来をあきらめるということですから。自分たちは、生き延びたいためにこの運動に踏み込んだわけです。だから、それをあきらめるということはあり得ないわけです。

だから、電話を切って、もう1回頭の中で考えて、もう1回電話をして、「すみません、辞めます」と言いました。事務所の社長はとても驚いてしました。社長は

そういうつもりではなかったんですよ。そもそもの電話は、「これはどうしたらいいのだろうか」という感じだったんです。なのに僕が「事務所を辞めます」と言ったから、社長は「えー！」って驚いて…。社長は、まさかそういう答えが返ってくると思っていなかったで、「しばらく様子を見るのはどうか？」と言ってくれました。ほとぼりが冷めるまで少し待ってみろというのが社長の提案だったんですけども、僕は、「これは、ほとぼりは冷めないですよ」と言いました。それでも社長は「いや、ちょっと待って。もうちょっと冷静になって考えよう。」と。それに対して僕が「いや、僕は十分冷静なんで」という話をしまして、それで結局辞めることになりました。とにかくあの時点では辞めるという選択肢以外はなかったです。

司会： 社長からの電話を受けて、その日のうちに決めてしまったわけですか。

山本： はい。1分後ですよ。1分後。

司会： そのときは、明日からはどうしようと思っていたんですか。

山本： 明日から？…。えーと…、その時点まだ舞台の稽古中でした。だから、事務所が取ってきてくれている仕事は当分決まっていたので、「明日からどうしよう」という気持ちではありませんでした。

でも、事務所とは関係なくなったということを早く世間に発表しなければならないとは思いました。事務所を辞めたから、事務所は関係ないから電話するのをやめてねということを早く伝えないと事務所が通常の業務に戻れないわけじゃないですか。肝心の電話が鳴り止まない。

司会： 今は山本さんはどこかの事務所に所属はしていないわけですか。

山本： 所属していません。事務所を作るというのは苦情電話の受付先をわざわざ作るようなものなので。

でも、役者のプロと一緒に仕事をできないということは、やっぱり役者という仕事には影響があると思います。

そうはいってもこの先どこかの事務所に入るということはないですよ。原発がなくなったらどこか入れる事務所を探そうかなとは思いますが。

司会： 先ほどメールの未読が200件というお話がありましたけれども、そうすると、事務所を辞めた後は、事務所にやってもらっていたことをみな自分でやっていたわけですか。

山本： そうですね。事務所を辞めますということを告げた後、マネージャーと話をしました。マネージャーから「いま話が進んでいるものはこれとこれとこれがある」というような話を聞いて連絡先を受け取って、そこに「すみません。フリーの山本ですが」みたいな感じで電話をかけてスケジュールを調整したりしました。

ギャラの交渉がいちばんやりづらいですね。いくらくれなんて言えないじゃないですか。そんなこと今まで言ったことがないですから。僕は今37歳なんですけど、16歳のときから芸能界にいて、そういうことはずっと事務所にやってもらっていたので、按配が分からない。「今はすごく予算が厳しくて」と、まずどこもそう言うてくるわけです。こういうことは、商売のやり取りとしてごく普通にお約束のように言うことなんでしょう。でも僕は最初はそれを真に受けていました。そういう風に

交渉の仕方が分からないところからスタートしました。

司会： 我々は芸能界のことはよく分からないんですけども、個人でこの仕事を続けていこうとすると、事務所に所属していたときと違ってほかにどういうことを自分でしなければいけないんですか。

山本： メイクさんの手配とか、どこかにいきますとなったらチケットの手配もしなければならぬ。あとスケジュールリング。これとこれを入れるとこれが入らなくなって、このままじゃダブルブッキングになる…みたいなことを手探りでやっていました。そういうことを全くしたことがなかったから、最初はパニック状態になったんですけども。

で、最初のころはテレビと市民活動というふうに両方のオファーが来ていたんですけども、時が経つにつれて、市民運動からのオファーしか来なくなってしまいました。そういう状況ですね。

司会： それでメール未読が200件という状態になってしまったんですか。

山本： そうですね。「どこどこに来てください」というメールが本当に1日100件単位で来ていました。僕と同じ思いで誘ってくれていたりとか、あるいは「力を貸して」と言ってきてくれるのに、僕にメールを見る余裕がなくて「あいつは返信もしてくれない」という話になってしまうのが本当にいやでした。誰か手伝ってくれないかなと思っていました。今年になって手伝ってくれる人が出てきたので助かっています。

司会： もう少し山本さんに続けてお話を伺います。山本さんは刑事告発もされたんですよね。刑事告発をなさったのではなくて、刑事告発をされてしまったわけですよね。

山本： はい。本当に盛りだくさんですね。いろいろなことが本当に死の灰みたいに降り注いでいますよね。

去年の夏、7月ぐらいだったと思います。佐賀県庁前で抗議活動のアクションがあるという話があって、その時は四国の徳島で仕事の予定だったんですが、日本地図を見たら徳島と佐賀は近い近いみたいな感じで。これだったら行けると思って、そのアクションに行くことにしたんです。

でも、佐賀に誰も知り合いはいませんでした。だから、ツイッターで、明日の抗議行動をする方をどなたか知りませんか、代表の方をどなたか知りませんかと発信してつないでいただきました。そしたら、たまたまつながった方が主婦の方で、昔から1人でずっと活動してきた方がいらっしゃって、その方と落ち合うことになりました。それで、佐賀での原発活動のことについて2時間ぐらいお話を伺って、それから市民運動に参加することになったんです。

僕は佐賀に行く前に、「すべての取材に答えます」ということを言ったんです。「だから取材に来てくれ」と。そうしたら、本当にいろいろなメディアが来ました。大きな新聞社もそうなんですけれども、iPhoneで動画を配信するような小さなメディアまでたくさん来ていました。僕は、最初はスピーチをして、その後に取材を順番に受けていきました。順番に取材を受けた後、渡されたマイクで「原発反対」みたいなことを言っていたら、集団が動き出して、県庁舎の中に入っていました。

僕もちろんその列に入っていきますよね。でも無理やり入るというような状況ではなかったんです。スッと入っていくような感じでした。みんながそのまま問題なく入っていったんです。それが、不法侵入だって言われて。あれは何でしたっけ？会場に僕の弁護をしてくれた担当弁護士がいるんですよ。

(会場から、「建造物侵入と威力業務妨害」の声)

山本： ありがとうございます。担当弁護士がいると便利ですね。いろいろな情報がもらえる(笑)。

でも、その告発は県庁側の人が訴えたわけではなくて、まったく関係ない京都のほうの方がニュース映像を見て告発状を書いたというんです。先ほど皆で打ち合わせしてしゃべっているときに、告発ってそんな簡単に受理されるのかという話になりましたよね。告発って受理されるまで結構大変なんですか？

司会： そうですね。大変ですね。

山本： それがあっさり受理されてしまうということはすごく怖いんですよね。しかもその現場にもいない、テレビ報道を見ただけの人の告発が受理されたというんですから。告発されるともうその時点で犯罪者扱いなんですよ。びっくりしますよ。本当に怖いですよ。結局、弁護士の先生方がすごく優秀な方だったので僕が犯罪者になるということはありませんでした。

今年の1月にインターネットのテレビで外国に取材に行くという企画があって、ある航空会社のタイアップで行くことになったんですけれども、スタッフ分の旅費は全員OKなのに、山本さんの旅費はちょっと出せないんですよと言われました。「どうしてですか」と聞くと、「いや、あの…ありますよね」みたいな。要は犯罪者扱いなんです。

司会： 航空会社のタイアップで、航空会社がスタッフ分の旅費は出すけれども山本さんの旅費は出さないということですか？

山本： はい。スタッフ全員分はただなんですけれども、僕のだけは有料だというわけなんですよ。

告発が受理されたというだけで、僕が犯罪者だとはまだ何も決まっていないのに。でもそのディレクターが、どうしても僕を連れていきたいという思いを持ってくれている方だったので、自腹で航空券代を払ってくれました。それで行けることになったんですけれども。

それで、そのチケットが発券された次の日に僕は不起訴になりました。

司会： それはいつのことですか。

山本： 12月です。不起訴だよという発表が、発券の次の日にあったんです。犯罪者扱いだった僕が犯罪者ではないということが証明されたわけです。

その不起訴の発表がもう1日早かったらディレクターは自腹を切らなくてもよかったかもしれない。

説明が長くなりましたが、はっきり言って風評被害ですね。犯罪者ではないのに。

司会： 志村さん、横でお話をお聞きになって、「えー！」っておっしゃっていましたがけれども、今のお話を聞いてどうですか。

志村： 僕は法律はよく分からないけれども、昔、成田空港の取材をしたことがあって、成田空港の反対派が千葉県庁になだれ込んでも県は何も言いませんでした。なだれ込んでガラスを割っても全然告訴しませんでした。

佐賀県知事というのはたしかお父さんが九州電力の出身で、知事は自治省出身かな。彼は事故後は原発にちょっと批判的になったんだけど、メール事件でいろいろあって…。

司会： メール事件とは“やらせメール”の件ですね？

志村： はい。僕は、佐賀県が最初に山本さんを告訴したのかなと思っていたら、そうではなくて、京都の関係のない第三者が告発したというので、そういうことが法律にあるということを初めて知ったんですが、何かちょっとおかしい。告発した人を誘惑した人がいるんじゃないかなと思っているんですよ。よく分からないですが、県民が県庁に無断で入っていったっていいわけだから、ちょっとおかしいなと思いながら聞いていたんです。

山本： でも、請願書とか嘆願書というものを知事本人が受け取ることにはしないにしても、代理人が出てきて受け取るのが普通ですよ。だって、税金を払っている人々がもの申したいと来ているわけですよ。お願いしますとって来ているのに、それを門前払いにするという扱ってどうなんだろうと思います。殿様みたいな感覚でやっているんですかね。

司会： そこまで強硬な対応をするというのはちょっと珍しいですよ。屈折した言い方をすると、やり方として下手くそというか…。同じ袖にするのでももう少しソフトな対応をすると思うんです。

山本： そうですよ。

志村： まあ九州の場合は、九州全体のGDPの3分の1が九州電力なんですよ。要するに、九州経済の3分の1は九州電力が握っているわけです。

佐賀県の場合は、のりとかそういう産業があるけれども、原発が佐賀県の収入の相当な部分がになっていると思うんですね。知事の親父さんも九州電力だったし、電力の力というのは九州ではそうとう強いわけです。中国四国も北陸もそうなんです。

そういう意味で県庁の人たちは、相当に原子力発電所に気を使っているんじゃないでしょうか。だから請願書を持っていっても逃げまくって出てこないのだろうと思います。

山本： 先ほど、やり方が下手くそと言われていましたけれども、下手くそでよかったですよ。

それが「はい、分かりました。あー、どうもどうも」と言っただけではただのガス抜きで終わってしまいますから。

司会： そろそろ会場からのご質問についてお伺いします。

まず山本さん。脱原発、反原発の運動をしていて、事態がよい方向に向かっているという実感はありますか。

山本： 行くたびに新しい出会いがあって、すごく熱いものを感じるんですけど、で

も、そういう広がりや間に合うのかなと思います。すごく焦っているというか、焦らなきゃいけないというか、急がなきゃいけないですね。

地震の活動予測がでたらめな原発があるわけだし、あと福島第1原発の4号機の問題もあるわけだし。4号機が倒壊したらもうあの周辺は立ち入れないわけですよ。4号機がそうなったら、東日本から、東京から飛行機で逃げろみたいなことになる。外国の専門家も東京から飛行機で逃げろと言っているぐらいだし。

新たに福島以外の事故が起きる可能性も大きいわけですよ。それに今、強行に原発を再稼働させようという動きもあります。だから、間に合うのかなという思いがあるんです。

そういう意味で、若い人や才能ある人は本当に外国に逃げたほうがいいよという運動に切り替えなくてはいけない時期が来るんじゃないかと思います。日本人を絶やさないために、アイデンティティを途切れさせない意味でも、そういう運動に切り替えなくてはいけない時が近づいてくる可能性があると思うと、ちょっとぞっとしますね。何が何でもこの国にいると考えるのは危険だなと思っています。

司会： 今度は志村さんに対する質問です。朝日新聞よりも東京新聞のほうが原発のことに関して鋭い記事が見られると思う。朝日新聞には何か限界があるのではないか、という質問です。

志村： 確かに紙面は東京新聞のほうが先行していますね。これは会社全体の方針で、東京新聞の場合は特報部とか社会部が原発問題に精力をずっとつぎ込んで書いている。だから僕は東京新聞を毎日おもしろく読んでいます。他方、朝日の場合は、組織が大きいいろいろな部門があって、まだ一部のチームがやっているだけで、東京新聞のようなところにまで行っていないのだと思います。

司会： 続きまして山本さんへの質問です。8チャンネルの小倉さんの番組に山本さんが出て、「発表を報道するだけなら、報道ではなく広報じゃないか」と山本さんが発言したのに対して、小倉さんとフジのアナウンサーがしどろもどろになっていた。カメラがオフになった後、彼らは何か本音を言いましたか、という質問です。こういうことがあったんですか？

山本： それ、フジの番組じゃないですね。僕はフジテレビに呼ばれていないですから。スカパーですね。スカパーの開局何周年かの結構大きな番組があって、フジの小倉さんと、それから日テレから加藤さん。そういった方々が司会をやっていました。それで、岩井俊二さんの「friends after 3.11」という映画が放送で流される前にトークをするということで僕は行ったんです。僕の方から、お2人は朝の情報番組をされているけれども、テレビは本当のこと流さないじゃないですかと言ったんです。そうしたらそれに対する反応があったんですね。要は、「100%大丈夫だという証拠のないものは流せないんだ」というようなことを言っていました。でもカメラが回っていないところでは小倉さんは、「言えないこともあるんだよ」というようなことを言っていました。僕の言うことは理解はするけれども、でもそれは難しいんだというような立ち位置で。加藤さんのほうは、「でもまあ福島の人が頑張っているんだから」という全然関係のない話をしていました。例えば京都の送り火の話にな

ったんですけれども、「福島の人たちは放射線を浴びているんだから俺たちもちよっとぐらい浴びたっていいじゃないか」みたいな話をされていました。放射性物質というものをまだちゃんと理解されていないのかなという印象がありました。

司会： あとお2人に対する質問で、身の危険を感じたことはありますか。ではまずは志村さん。

志村： 直接に感じたことはまだありません。

僕のあの本を書評で扱ってくれたのは赤旗と世界日報とニューヨーク・タイムズだけでした。その後で朝日と日経も扱ってくれましたけれども、ほかの新聞は扱ってくれませんでした。それから、経済誌にも本を送りましたが、「中身はおもしろいんだけど、東電に世話になっているから勘弁してくれ」というようなのがほとんどでした。

東電の南社長に本を送ったら南社長から電話がかかってきて、「一度東京電力にいらっしゃいよ」と言われました。でも顔を知られているので入っていったら大変だなと思って、まだ行っていません。

東京電力自体が何もしなくても、東京電力の考えを忖度して自分が得点を上げようということをする人がいる可能性もあるわけです。

それから、東京電力に2011年9月現在で天下りが51人いるんですが、そのうちの32人が警察官僚です。その32人のうち1人が警察庁のキャリア官僚で、残りの31人が各県警の出身OBです。だから、51人のうちの31人が各県警の出身の警察官。これがどこに散らばっているか分かりませんが、こういう人たちはおそらく反対派の情報とかいろいろな情報を取っているのではないかと思います。異常ですね。

いずれにしても東京電力というところは情報を取るのはすごいです。テレビも新聞も全部チェックしています。もしかしたらこの会場にも来ているかもしれません。そういうすごいところですから、やっぱり気をつけなくてはいけないと思いますね。

司会： では山本さん。

山本： 怖い目にはあったことないですね。

でも広瀬隆さんには、原発立地の自治体に行くときには気をつけろと言われてました。この間、福井へ行ったときに議会を傍聴したんですけど、傍聴席のど真ん中に、ちょっと柄の悪そうな人が4人ぐらいいまして、後で公安の人が、あれは右翼で地元のやくざなんだと言っていました。そのうちの1人が、「山本太郎はグリーンピースから金をもらっている売国奴や」みたいなことを言っていました。

こういう人たちにまで原発マネーというのは行くわけじゃないですか。だから、こういう人たちの新しい糧が何か見つからない限りは、ここの問題は解決しないということを感じました。

怖い思いをしたことは今のところはありませんが、こういうのを見たときに、本当にすごく根が深くて広いんだなということを感じました。古くから活動してきた方は今までいろいろな目に遭ってきたのだろうなと思います。

私は都民投票の請求人代表をやったんですけれども、書類には家の住所まで書かなきゃいけないんですよ。マンションだったら部屋番号まで。でも変な人は来ませ

んでした。僕はそんな影響力ないと思われているんでしょうね。ノーマークなんです。

先ほどお話しされていた、東電の方でブログ開いて内部告発みたいなことだったら、本当にやばいんじゃないかと思います。そういう方は本当に情報を握っているということですよね。

司会： ではまた私からの質問に戻ります。志村さん。3.11以降、原子力発電そのものについて各メディアがいろいろ取り上げてきて、東電をあからさまに批判するものとか、原発はいらないという論調がテレビでもだんだん増えてきたように思うんですが、志村さんの実感はどうですか。

志村： 随分出たんですけれども、まだ福島の本当の実態は明らかになっていないと思うんです。

いちばんの問題は、福島の原発が地震でどれだけ壊れて、津波でどれだけ壊れたかが明らかになっていない。最近、新潟県知事が記者会見で話したのですが、福島の原発は1発目でそうとう壊れているというんですね。新潟の知事が柏崎と福島の原発の技術者から聞いた話によると、だいぶ壊れているんだそうです。でも東電は絶対に壊れていないと言う。政府も何も言わない。本当ならば、全部壊れたところをこれからどう直すか。どこが悪いかということ、今動かそうとする原発に生かさなきゃいけない。それをやっていないですね。

中国で夏に高速鉄道が転覆して落っこちて、悪いのはすべて雷だということで、運転席を埋めちゃいましたよね。本当ならば運転席に計器があるので調べなきゃいけないのに埋めちゃった。日本はマスコミもみんな、中国はあんなことやっていって笑って言うけれど、日本も福島で同じようなことをやっていて、まったく原因を調べていないわけです。だから、その辺のところをもっとマスコミは追及しなければいけないし、明らかにしていけないといけない。

テレビは僕もフジテレビに出たことがあります、そのときは総括原価方式の話をしてくれというので1時間半ぐらいしゃべったけれども、10秒ぐらいしか使ってくれませんでした。長い時間しゃべっていた人はどこかの研究所の人だったのですが、使う用語に間違いが多くて、付け焼刃の印象を受けました。おそらくこれは電力業界の推薦の人がしゃべったのだと思いますけど。

だから、テレビなんかも本当にとことんまでやっていないですし、その辺がまだ弱いんじゃないかなと思います。

僕としては逆に、事故直後の4月、5月よりまだ本当に突っ込んでいないんじゃないかなという感じがします。だんだん飼いならされてきたのではないかと思います。

司会： そろそろ終わりの時間が近づいてきました。最後の質問になってしまうかもしれませんが。

先ほどの山本さんのお話ですと、俳優生命が危うくなったまでは言えないかもしれませんが、反原発の意見を言うだけでこれだけ甚大な影響を受けている。たかが発電の仕方について意見を言うだけでそういう影響を受けているわけですね。そ

ういう世の中について、志村さん。何とか変えられないでしょうか。世の中を変えるためのヒントは何かないですか。

志村： みんなが自分の意見を反映して、選挙でやらないとダメだと思いますね。

今まで話を聞いてきていちばん感銘を受けたのは、全日本仏教会の会長で妙心寺の管長の記者会見です。仏教会は原発反対に転じました。その話は仏教会の会長の個人的な体験に基づくもので、戦争が終わったときに中学4年で軍需工場にいたんだけど矛盾を感じて坊主の世界に飛び込んだと。臨済宗は戦闘機2機を寄付して戦争に賛成していた。仏様の教えは人の命を守ることなのになぜ仏教会がそんなことをしたんだということで、50年経ったときに、戦争に加担したのは間違いだったと全日本仏教会は懺悔したそうです。そして今、みんなが電気の恩恵でいい生活をするために福島の人を追い出して犠牲にしたんじゃないかと。福島の人たちは故郷にいつ帰れるか分からないし、財産も家もみんな捨てている。こういう犠牲の上に立って今の電化生活が成り立っているのであって、これは間違っている。だから、原発をやめて、電気が少しぐらい足りなくてもみんなが我慢しなくてはいけぬ。それが仏の教えである。そういう話をしたんです。

ノーベル賞の受賞者も、人類が原子力をコントロールするのはまだ無理だと言っていました。あと100年か200年経ってやっとできるのであって、今は制御できないという前提で考えなきゃいけないと。

原発の原理は原爆と同じで、それをだましだまし運転しているわけで、そういうことにみんな気がついて、やっぱり原発はもうなくして、ほかのものでやっていかなければならない。我々も生活を少し質素にしていこうということを考えなきゃいけない。そういうことなんですね。

だから、停電もあったほうがいいし値上げもあったほうがいいし、その中で我々が考えていくんじゃないかと思います。東京電力が値上げすればするほど、自家発電が増えていくし節約も進むだろうし、みんなが考えるようになるだろうと思います。

司会： 山本さんに最後の質問ですが、俳優として、また、原発に反対の意見を表明した有名人としてという言い方もできるかもしれませんが、今後の抱負をお聞かせ下さい。

山本： 今後の抱負ですか。長生きすることですね。そのひと言に尽きますよ。だって、ばかばかしい話じゃないですか。こんな発電方法に関してどうしてここまでみんながいろいろ悩んだりしなきゃいけないのか。本当に。

でも、これは、50年ぐらいかかって作り上げた原発の利権構造をあきらめられない大人たちがいるからこうなっているわけですよね。

だって、再稼働させるのにどこまでルールを変更する気なのか。その頑張りをもっと違う方向に向けてくれと思います。フットワークを違うほうに使えないのかなと思いますよね。自分たちに都合のいいルール変更ならいとも簡単にやっちゃいますもんね。

でも、本当にこの状況を変えられるのは市民の力だけなんですよね。今、国がや

っていることは、この日本という国の未来をあきらめているとしか思えない。そんな政策しかしていないですもんね。

これから自分がどうなっていくのか、俳優としてどうなのかという問題は、もう本当に小さすぎてどうでもいいものになっています。生きていればもうどうにでもなるなという気持ち。

自分1人で生きていてもしょうがないから、周りのみんなにも生きていてもらいたいから、そのことをちゃんとできるような世の中になって欲しい。自分は、本当にこの先まずいぞということになった時に、本当に外国にオーバーステイしてでも自分と自分の周りの人たちの命を守りたいと思っています。本当にこの国を捨てる覚悟というのもある程度しょうがないのかなとさえ思っています。

これはお金があるから逃げれるだろうという話じゃないですよ。だって、自分の貯金は食いつぶしているんですから。だからオーバーステイでもって言っているんですよ。

だけど、本当に生きていたい。これは生物として当たり前の願望ですよ。もうDNAに刻み込まれていることです。生き続けるという願望は。だから、自分の中でこの国をいつ見限るのか。本心ではそうしたくないから今でこうやって声を上げているわけで。でも、最悪の事態に対してもやっぱり備えをしておかなきゃダメですよ。

最悪の状況を考えていなかったから、こんなに悲惨な出来事が起きて、いろいろ隠さなきゃいけない世の中になったわけで。

僕の中での線引きは、次の選挙だと思っています。俳優がどうのこうのというのは、もはやどうでもいい状況になっています。

司会： ありがとうございます。